DYNAMIS, 7 (2003), 57–75

完了形と過去時制

—古チャ方言テクストの用法に見る南スラヴ語の動詞体系の変化—

三谷　惠子

0.

現代の東スラヴ、西スラヴの多くの地域方言では、過去時制形として、もともと＜完了形＞であった迂言形[1]を使用し、アオリストと、そこから派生的に形成される未完了過去という二つの単純過去形を失った。一方、南スラヴ方言のいくつかは単純過去形を保持し、完了形とともに動詞時制の範列を構成している。しかし単純過去形がどの程度生きた形式として用いられているかは、方言変種によってさまざまである。本稿では南スラヴ語の一方言であるチャ方言の完了形と単純過去形の競合関係を通時的に探り、完了形が過去時制の一般的な形式へと変化するスラヴ語の傾向の中にどう位置づけられるかを考察する。

1.

1.1.　スラヴ語にはもともと、過去をあらわすアオリストおよびそこから派生した未完了過去形（以下この二つの形式をあわせて「単純過去形」とする）があり、一方、不定詞語幹に-l（エル）形態素を付加することで形成される能動完了分詞（俗に l 分詞と呼ばれる）を用いた迂言形は、ある時点に先立って起きた事態の結果生じた状態をあらわす結果相あるいは発話時点における関与性を表す完了の意味を持っていた [Meillet 211-212]。しかし東スラヴ語や西スラヴ語の多くでは、単純過去形と完了形の二系列からなる動詞の時制体系は崩れ、現代語に至るまでの間に、単純過去形が失われるとともに完了形が過去をあらわす唯一の時制形式となった。

南スラヴ語の状況を見ると、地理的に最も北に位置するスロヴェニア語では、文献から確認できる範囲で、1360 年頃の北西方言で書かれた ツェロヴェッツ-ラテチェ手稿 (Celovški - rateški rokopis) にアオリストらしき形式が見られる（》na tretji dan gori *vstaa* od martveh《「三日目に死者たちの中から立ち上がり」）が、1428 年のスティチ

[1]本稿で扱うのは biti (be 動詞) の不完了体現在人称形を助動詞とし能動の完了分詞とともに形成される完了形である。biti の過去形＋完了分詞の過去完了形 (pluperfect)、biti の完了体現在形＋完了分詞の未来完了形もあるが、これらについては本稿では扱わない。

ナ手稿 (Stiški rokopis) にはすでに単純過去は見られない [Lencek 115 ; Mikhailov 80]。イタリアのフリウリ地方で用いられているレジア方言など一部の方言が比較的後世まで単純過去の形式を保持したが、多くの方言では 15 世紀の末までにこの形式を失い、過去時制を表すために完了形に依存するようになっていたと考えられる [Lencek *ibid.*]。

スロヴェニア語と地理的に連続するカイ方言（クロアチア北西部）においても単純過去形は現在すでに消失し、いくつかの石化した形（*reko* < rekoh「私は言った」）が残されているのみである。アオリストはいくつかの地域で 16 世紀頃までは用いられていたが、未完了過去はその頃にはすでに文章語でのみ用いられていたとされる [Lončarić 109]。

現在のセルビア／クロアチア／ボスニア語の標準形はシト方言とよばれるスラヴ語方言をもとに成立した。この方言および標準語では、シト方言地域以北とは異なって今日もなお単純過去形（アオリスト、未完了過去ともに）が保持されている。ただしこれらの形式は文法的に動機づけられてというよりは、文体的な効果に基づいて使用され、どのような場合でも意味を変えることなくまた文法的適格性を損なうことなく、完了形に由来する迂言形の過去形に置き換えることが可能である。

南スラヴ語の中で最も南のブルガリア語、マケドニア語はバルカン言語連合に含まれ、アルバニア語やルーマニア語などと共通する一連の特異な言語現象を示す。その中で、おそらくトルコ語からの影響と考えられ、メグレノ・ローマニア語（主にギリシャに分布する東ロマンス語系の少数言語、ダコ・ローマニア語［いわゆるルーマニア語］と系統的には近い）及びアルバニア語と共通するのが証拠性のカテゴリーの獲得である。ブルガリア／マケドニア語では完了分詞がこの範疇の表出を担うように変化した。この変化との直接的な関連性の有無はまた別の議論となるが、これらの言語においては時制体系は他のスラヴ語と比較してかなり異なって発展し、単純過去形が過去時制の形式として保持されることとなった。

このように、スラヴ世界の最南の地域を除くと、単純過去形が失われ、もとの完了形が過去時制全般を表すようになる傾向はスラヴ語世界に広く優勢な傾向であり、また同じような傾向がみられるロマンス語やゲルマン語のいくつかの言語とも共通する通時的変化のあり方であるといえる。これらの言語において完了形が過去時制形として用いられるようになるプロセスは、単純過去形の衰退と相関的にとらえる必要がある。このことを考慮に入れるなら、完了と過去の力関係をおおむね４段階にわけてとらえる

ことができるだろう：

第I段階：単純過去形が生きた形式として過去時制を表すために機能し、一方完了形は基本的に本来の完了（結果相的意味、発話時点における関与性など）の意味で用いられる。従って同じ文脈で意味を変えずに完了形を過去形の代替形として用いることは原則としてできない。この競合関係はおおむね、現代標準英語の過去形と現在完了形の関係にあてはめることができる。

第II段階：完了形が過去時制の領域に侵入しはじめ、述語として用いられる動詞語彙によっては、意味的変化や文法的困難を引き起こさずに過去形に替えて完了形を用いることができる。完了形と過去形の間に機能的等価性が生じうるこの段階にあるのは、例えば標準ドイツ語、上ソルブ語などである。

第III段階：単純過去形は動詞の体系の中にとどまっているが、その使用は文体的に特徴づけられた場合などに限られ、日常的には完了形が特別な制限なしに過去時制の領域を覆って用いられる。現代フランス語[2]、セルビア／クロアチア／ボスニア標準語などはこの段階にあるといえる。

第IV段階：単純過去形は失われ、完了形が過去時制を表す唯一の形式として用いられる。スロヴェニア語、チェコ語、ポーランド語など、多くのスラヴ語はこの最終段階に至っている。

＜完了形と単純過去形の競合関係＞

段階	過去	完了（結果、関与性）	言語の例
I	単純過去形	完了形	標準英語
II	単純過去形／完了形	完了形	標準ドイツ語 上ソルブ語
III	（単純過去形） 完了形	完了形	セルビア／クロアチア／ボスニア標準語 現代フランス語
IV	完了形	完了形	スロヴェニア語 チェコ語、ロシア語

[2]ここではフランス語の単純過去 (passé simple) のみを考えている。フランス語の今ひとつの単純過去形である半過去（未完了過去）は現在も十分に活用される生きた形式であり、全般にアオリストより先に未完了過去が衰退したスラヴ語とは状況が異なる点は興味深い。スラヴ語においてフランス語のように未完了過去が必要でなかったことには動詞の体（アスペクト）の発達が関係していると考えられるが、これについての考察は本稿の議論の範囲外である。

もちろんこれらの段階の間にはそれぞれ、過渡的な段階があるとしなければならない。しかしこの四段階を通してみれば、おそらくIから順次IVに至るまでがスラヴ語の完了形がたどってきた通時的な道筋であることはあきらかであろう。

1.2.　シト方言と隣接する南スラヴ語の中で、現在のクロアチアに含まれる、アドリア海沿岸部ダルマチア地方で使用される方言はwhatに該当する疑問代名詞にčaという形を用いることからチャ方言（čakavsko narječje）と呼ばれている。チャ方言は現在、イストラ半島から北ダルマチア沿岸部、島部を南に下り、陸上では中部ダルマチアの古都スプリトの辺りまで、島部ではさらに南のコルチュラ島までを使用領域とする。中世においてはより広く内陸部にも分布していたとされているが、オスマン帝国の支配が及んだ16世紀以後、バルカン半島の住民が居住地を変えたことの影響で今日のように、海岸部にわずかに残る方言分布となった [Ivić 2001 : prilog]. チャ方言はさらに、共通スラヴ語の*ěの反映形によってイ方言（ikavski）、エ方言（ekavski）、これらの混交方言に下位区分される。

チャ方言の共時的記述研究の多くは、今日、チャ方言の大部分で古い時制体系が崩壊し、単純過去形は失われて完了形が過去時制を表す形式として使用されていることを示唆している。Belićは [Belić 1931] で「全てのチャ方言で未完了過去は完全に失われた」と断言し [Belić 1931 (1999 : 373)]、またそれに先立つチャ方言の記述 [Belić 1919] では，アオリスト、未完了過去どちらの単純過去形についても、何の言及もしていない。その他の、より新しい記述研究、たとえばHoutzagers [1988], Lukežić [1996], Kalsbeek [1998] なども単純過去形について言及、記述はしていない。一方、Pecoはただ「(チャ方言では) いまもって未完了過去、アオリストは使用されているものの、限られた範囲で、しかも形態論的に縮小された新しい形式になっている。南チャ方言ではこれらの形態はほとんど用いられない」"(čakavski govori) još uvek znaju za upotrebu imperfekta i aorista, mada sa znatnim ograničenjima, morfološkim redukcijama i inovacijama. Južniji čakavski govori skoro da i ne znaju više za ove oblike."[Peco 139] とのみ述べている。

1.3.　現代チャ方言の記述研究で動詞時制についてもっとも詳細に記述しているもののひとつは [Hamm, Hraste, Guberina 1956] であろう。この研究によればスーサク島のチャ方言は古い時制体系をよく保存し、アオリスト、未完了過去がなお用いられているという。それらの形式を参考に示すと、以下のようになる：

Susak 島の単純過去形 [Hamm, Hraste, Guberina 119]

	未完了過去		アオリスト		
	zvonit 「鳴る」	xodit 「通う」	iti 『行く』	speć 『焼く』	ubit 『殺す』
1sg	zvonax	xojax	jidox	spečox/spekox	ubix
2sg	zvonaše	xojaše	jide	speče	ubi
3sg	zvonaše	xojaše	jide	speče	ubi
1pl	zvonaxomo	xojaxomo	jidoxomo	spečoxomo/ spekoxomo	ubixomo
2pl	zvonaxote	xojaxote	jidoxomo	spečoxote/ spekoxote	ubixote
3pl	zvonaxu	xojaxu	jidoxu	spečoxu/ spekoxu	ubixu

単数人称語尾では、アオリストは動詞過去語幹＋-(o)x, -(e)、未完了過去は同じく過去語幹＋-ax, -aše をとり、古教会スラヴ語、古チャ方言と同じである [Damjanović 1984 : 141-142] 。しかし複数人称語尾は教会文語の伝統とは異なり、アオリスト、未完了過去ともに同じ複数語尾形態素となる。一人称複数の-omo、二人称複数の-ote は現在時制語尾の影響を受けた形とも考えられ、アオリストにも用いられている三人称複数の-xu (hu) は本来未完了過去の形式である。アオリストは古いスラヴ語に見られるのと同じように、過去の事象、特に連続して生じた出来事を次々に語る場面で用いられるほか、標準語（シト方言）であれば目的節の中で主として完了体現在形であらわされる事象に対して用いられる（na vla'su sen se uvartila da ne *padoh* [AOR < pasti]「倒れないように 私はかろうじて身を支えた」)。未完了過去は持続的事象や過去の習慣（M^{u}oj otac *uzaše* puoć na rybe svaki večer. 「私の父は毎晩魚を捕りに出かけたものだ」）等をあらわすほか、非現実の事態をあらわす仮定法の構文を形成する：da *bujaše* lipo vrime, bujah p^{u}ot v lošini「天気が 良ければ 私はロシーニに行ったのだが」[Hamm, Hraste, Guberina 140, 132]

1.4. この susak 島方言のように単純過去形を維持した方言も一部にあるが、チャ方言の大部分で単純過去形は廃れ、完了形が過去をあらわす唯一の形式となっている。従って、先にみた四段階の中に位置づければ、若干痕跡をとどめているという点で第 IV 段

階に至っているとはいいがたく、おおむね第 III 段階と第 IV 段階の間に位置するということになるだろう。

チャ方言使用地域には 12 世紀からの文語伝統があり、中世（13-16 世紀中期まで）においては教会スラヴ語クロアチア変種や、土着のチャ方言を基盤とした文章語によって記された多くの文献資料が存在する。それらの資料からある程度変遷をたどることができるチャ方言動詞時制体系の通時的変化によれば、アオリストは比較的最近まで、また未完了過去も 17 世紀頃までは普通に用いられていたと想定される。従って本稿が問題とする、それに先立つ古チャ方言の時代には、すくなくとも文章語（文献に現れた言語）の中では単純過去形と完了形が共存していたことになる。その共存の関係はどのようなものであったのか、もし, 単純過去形が過去の時制表現をになっていたとしたら、完了形の機能はどのようなものであったのか、以下では具体的にテクストから例を見ながらこの点を検討していきたい。

2.

2.1. 「古チャ方言文章語」(staročakavski književni jezik) をここでは、13 世紀半ばから 16 世紀初頭までの間に、チャ方言使用地域（ダルマチア北部、イストラ半島）で成立した世俗テクスト（物語、伝記、実用文書など）に使用された言語で、土着のチャ方言の言語特徴を顕著に示しながら一定の文法・文体的基準を志向して書かれた文字言語の総称とする。

古チャ方言文章語で書かれたテクストとしてまず『教父伝』(Žića svetih otaca [Vitae sanctum paterum] 以下ŽSO と略）を取り上げる。『教父伝』」は中世キリスト教世界各地に流布した『教父列伝』の系列に属するテクストで、クロアチアにおいては、ザダル付近で 14 世紀頃ラテン語からチャ方言に翻訳されたと推定されるテクストが唯一現存する。手稿は北ダルマチアのラブ島にある聖アントゥン女子修道院で 1930 年代に発見され、１１×１４センチの紙１３４葉にラテン文字で書かれていて、180 ほどの短いエピソードを含む。テクストは、多くの物語テクストと同じように、語り（地）の部分が過去時制で述べられ、登場人物の言葉は直接話法で挿入される。従ってテクスト全体として過去時制にどのような形式が用いられているかを調べるのには適した資料である。

ところで、古クロアチア語研究全般の中で単純過去形については [Režić 1980 ; Hercigonja 1983 : 418-423 ; Damjanović 1984 : 143-146] などが考察している。単純過去の形式は、中世文献での使用頻度の高さ、完了形との競合関係、そして動詞のア

スペクト的特性（現代語で＜体＞に相当する特性）とアオリスト／未完了過去の形態論的構成との関係といった観点から、多くの関心を引きつけてきたものと考えられる。一方、完了形についてはさほど十分な検討がなされていないように見られる。たとえばこれから検討しようとするŽSO の解説の中でも、完了形については次のように記述されている程度である：「(完了形の用例は) ŽSO の過去形の中でもっとも少なく、その他の過去時制形に対してなんら文体的有標性をもたない」[Malić 548]。実際、本稿筆者がキーボード入力したテクストから得られた数値で、ŽSO の総語数（259,280）のうち、完了形は 213 例（完了分詞と助動詞を合わせて一例と数える）であるのに対し、単純過去形はすべて合わせて 2000 例を超えている。しかし用例が少ないことがただちに言語構造上重要でないことを意味するわけではない。

次の表 (I) はŽSO の完了形の用例数を人称、数別に示したものである：

表（I）　ŽSO の完了形用例数

	単数	複数	双数	計
1 人称	58	3	1	62
2 人称	59	6	0	65
3 人称	81	5	0	86
計	198	14	1	213

表からただちに読み取ることができるのは、どの人称も単数の用例が複数、そしてもちろん総数の用例に比べ圧倒的に多いことである。これはしかし、文法的問題ではなく内容的な問題と考えられる。ŽSO では短いエピソードの中で主に個人の出来事が語られる。単数形の使用が多くなることは必然的といえるだろう。もしテクストの内容が複数の人々による行為をしばしば描くものであるならば複数が、また後に検討する Dundolovo viđenje (「トゥンダイルの幻視」) のように二人の行為が物語の中でしばしば話題になる場合には双数の用例数がある程度多くなることも容易に予想される。

ところでŽSO のそれぞれのエピソードは、語りの部分と、登場人物の会話の部分から構成される。当然、語りの部分には三人称、会話の部分には一、二人称形が相対的に多く現れるという人称形の分布が予測される。そこで全テクストを語りの部分 (N [aration]) と会話の部分 (D [ialog]) にわけて完了形の用例数を調べると次の表 (IB) のようになった：

表 (IB)

	N	D	
1 人称	0	62(58/3/1)	62
2 人称	0	65(59/6/0)	65
3 人称	27(26/0/1)	59(55/4/0)	86
計	27(26/0/1)	186(172/13/1)	213

括弧内の数は順に（単、複、双数）

一人称、二人称の完了形の用例はすべて D に出現し、また三人称の全用例 86 のうち５９例が D に現れている。１、２人称はそもそも直接対話に用いられる人称形なので、D の部分に集中することは当然予測されるが、三人称においても偏りがあるように見える。

2.2.　ŽSO のテクストを N, D の二つの部分に分けると、完了形の出現が D に偏っていることがわかった。ではこの偏りはŽSO に固有の特徴なのだろうか、それとも他の古チャ方言文章語テクストにも共通してみられる特徴なのだろうか。もし後者であれば、この言語の完了形がある特殊な機能を持って用いられていたことを示唆するものといえるだろう。この点を調べるために、さらに別のテクスト、具体的には二つの文献資料、Dundolovo viđenje (以下 DV と略) と Istarski razvod (IR) の完了ならびに単純過去の用例数とその分布を調べた。

DV（»Tundolovo viđenje«とも呼ばれる）『トゥンダイルの幻視』は、12 世紀にアイルランドで成立し中世ヨーロッパに流布した物語で、クロアチアでは Lulić 集として知られる 16 世紀のラテン文字で書かれた文選と、１５世紀のグラゴール文字文献である Petris 集に、それぞれラテン語からチャ方言への翻訳が含まれている。非教会文献で説話のジャンルに分類され、翻訳テクストであるという点でŽSO と共通するテクストである。本稿では Petris 集のテクストをもとにした [Stefanić 1969 : 200-219] から資料データを取った。一方、IR『イストラ境界区分』は、イストラ半島南部の封建領主たちの領地の境界区分についての記録文書で、１４世紀に成立したグラゴール文字文献である。チャ方言で書かれた法文献だが、１３世紀に作られた　Vinodolski zakon『ヴィノドール法』やそのほかのダルマチア中世都市法とは異なり、領地の境界区分の様子を同行した書記官が一部始終記録するという体裁をとって、領主たちの言葉

は直接話法で書かれている。そのため、ŽSO や DV と同じように、書記官の記録部分を N, 登場人物の言葉の直接引用を D としてテクスト全体を二つの構成部分に分けることができる。本稿では [Bratulić 1992] の校訂テクストを分析資料とした。

次の表 (II) はこの 2 つのテクストの単純過去形 (S[imple] P[ast]) と完了形 (P[er]F[ect]) の出現数を N, D ごとに分けたものである

表 (II) DV と IR のデータ

	DV		IR	
	SP	PF	SP	PF
N	506	14	980	120
D	25	65	2	34
計	531	79	982	154

さらに次の (III) は SP の人称ごとの出現数、また (IV) は PF の人称ごとの出現数である（括弧の中は左から単数／複数／双数）：

表 (III) 人称別の SP 用例数

	DV		IR	
	N	D	N	D
1 人称	2(1/1/0)	5(5/0/0)	1(0/1/0)	0
2 人称	0	4(4/0/0)	0	0
3 人称	504(469/35/0)	16(16/0/0)	979(970/0/9)	2(1/1/0)
	506	25	980	2

表 (IV) 人称別の PF 用例数

	DV		IR	
	N	D	N	D
1 人称	1(1/0/0)	10(10/0/0)	0	3(0/3/0)
2 人称	2(0/2/0)	34 (34/0/0)	0	10(0/10/0)
3 人称	11(11/0/0)	21(6/8/7)	120 (55/65/0)	21(7/14/0)
	14	65	120	34

これらのデータからはまず、SP の三人称形が他のどの形式に比べても際立って多いことがわかるが、それらの大部分は N に出現している。一方 PF の一人称、二人称はどちらのテクストでもほとんどが D の部分に現れている。直接対話以外の部分に完了形が使用される例が DV で 14 回あるが、そのうち 4 例は物語の語り手から読者への語りかけの形式として使用されているもので、直接対話の用法の一種といえる。また残りの完了の例のうち 2 例は biti の完了形で、状態をあらわしている（これについては後で用例を見る)。IR では N に出現する PF は 120 例と多いが、これらは発言動詞などの補文の中で、発話時点に先立って起ったことがらをあらわすための相対的過去として用いられている。こうした個別的用法に鑑みてデータを見直すと、上記の SP, PF の分布からは、これらのテクストでも PF が主として D の部分で用いられ、N においては基本的に SP が用いられるという傾向、すなわちŽSO と同様の傾向があると考えることができる。

2.3. 限られたデータではあるが、2 つの類似したテクスト（翻訳物語のŽSO と DV）と 1 つの異なるジャンルのテクスト（オリジナルの実用的文書 IR）に共通した傾向が見られることから、これを古チャ方言文章語に広く認められる傾向と仮定し、そこにおいて完了形は、単に使用度の低さによって特徴付けられるのではなく、語りの部分での使用度の低さ、そして直接対話の部分での多用という分布によって特徴付けられる、といえることを確認しておきたい。この関係はバンヴェニストが現代フランス語の単純過去を談話 (discours) の、そして完了形（複合過去）を歴史（histoire）の形式と呼んだ、あるいは Weinrich が「語られた時間」(erzählendes Tempus) と「説明の時制」(besprechendes Tempus) として区別した [Weinrich 1971] テクストの二つの時制の関係に相応するように見える。この考えを援用すれば、古チャ方言における完了形と過去形の関係も、文法的意味の差異によってではなく文体的機能の異なりによって説明されるべきものということになる。だが、このような判断を下す前に、文法的に完了形はどのように特徴づけられるのか、今少し詳しく検討する必要がある。

3.

3.1.　まず完了形が使用されている文脈から、完了形の文法的意味を探ってみたい。

完了本来の意味、すなわち発話時に先立って生じた事象の結果残存や発話時点への影響、関与性などを表す用法は、次のような完了体動詞によって事象が述べられる場合に明瞭に読み取ることができる（斜体字部分が完了形）：

(1) - Molju vas, recite mi kako *ste* i vi ovde *prišli.* [ŽSO 92]

お願いです、どのようにしてあなたまでがここに来たのか教えてください。

(2) - Ese ča mi *je ućinila* ova hći djavlja. [ŽSO 150]

これが、この悪魔の娘が私にしたことだ。

(3) - Gospodine, *oživil me jesi* i *povratil* me *jesi* iz ove glubine paklene gorućeje. [DV 203]

主よ、あなたは私を生き返らせこの燃えさかる奈落の底から戻してくれました。

(4) - Ova gospoda *je su* tako *naredili* i ote da bude tako. [IR 7]

これらの貴紳方がそう命じられ、また以後もそうあることを望まれている。

これらの例で完了の意味は、節に含まれる副詞句（(1) の ovde, (2) の ese）や、語られる状況とそれを語る話者の置かれている状況（(3) の例では話者から対話相手への直接の呼びかけ、また (4) では過去と未来をつなぐ発話の状況）から判断される。

一方、完了形が単なる過去を表すと思われるか、少なくとも、発話時点の状況との関与性が明示されず、完了本来の用法というよりは過去時制の代替表現として用いられると考えられるのは次のような例に見られる：

(5) - Kako to jest da ova 2 kralja ka ja znam, ona *sta* po vsa svoja vrimena dovolje zla *učinila*, jere sta se meju sobu vele *ratila* i mnogo ljudi *jesta* meju sobu *stratila.* [DV 214]

私が知るあの二人の王、生前あれほどの悪をなした者たちが（ここにいるのは）どうしたことですか、なんとなれば二人は大いに相争い、多くの人々を処刑したのですから。

(6) - Takoje *učinil jest* sedam krat i vrati se v pamet svoju. [ŽSO 56]

同じように７度行い、我に返った。

過去の事象を述べる完了形が単純過去形に置き換え可能であることは、次の用例がよく示すだろう：

(7) - O duše, *jesi* li ove vse *razgledala* i *viděla*?

- *Viděh*, moj predragi utěšitelju. [DV 218]

おお魂よ、あなたはこのすべてを歴訪し見たか？

見ました、わが最愛の救済者よ。

(8) ... kamo si se koli ti obrnul i kada si sěděl i jel i pil, govoril, mlčal i spal i va vsako vrime nisam bil indi nere pred tobu i s tobu, a ti nigdare ne *hotě* moga

světa poslušati. [DV 204]

あなたがどこに赴こうと、またあなたが座り飲食し、語りあるいは黙し眠っている間、いついかなるときにも私はあなたの前、あなたと一緒にいる以外にはなかったのに、あなたは一度たりとも私の忠告を聞こうとはしなかった。

(7) では、話者（天使）が二人称単数形で Dundol の魂に完了形（jesi viděla?）で質問したことに対し、一人称の答えはアオリスト (viděh) である。また (8) では天使が Dundol の魂を断罪する場面で、生前の所行について完了形で続けて述べた後に「一度たりとも私の忠告を聞こうとはしなかった」という箇所をアオリストで締めくくっている。これらの例を見る限り、少なくとも完了形と単純過去形の使い分けが文法的意味の違いを反映しているとは考えにくい。(7)(8) のように、単純過去形と競合して現れる完了形が、同じ形式の連続使用を避けるための文体的な一種の異化作用なのか、あるいは偶然なのかは、今後用例をさらに集めて検討する必要がある。

完了形が不完了体動詞から作られ、反復や継続などの事象を表す例も少なくない：

(9) - Veruj mi, sinu, nimam pokoja dokola mi ne rečeš ča *si činil* ali *mislili* ovoje noće. [ŽSO 177]

よいか息子よ、お前が今宵何をし、何を考えていたかを私に話すまで、私は安らかではない。

(10) - Ja *jesam* vazda poli tebe *hodil* i kamo *si se* koli ti *obrnul* i kada *si sěděl* i *jel* i *pil*, govoril, mlčal i spal iva vsako vrime nisam bil indi nere pred tobu i s tobu. (8 例と同じ) [DV 204]

(11) - Is toga grada *bil jest* jedan muž rodom, imenit i glasit, imenem Dundul. [DV 201]

その町に名高く誉れ高い家の生まれ、名をドゥンドルという男がいた。

以上いくつかの例で示したように、完了形は用いられる動詞の意味やアスペクトの制約を受けず、また完了本来の意味で用いられるのみならず、過去時制を表す状況でも用いられることが確認された。

3.2. 次に、副詞句との競合関係によって完了形の文法的意味を明らかにしたい。よく知られたライヘンバッハの E, S, R（E：事象時点；R： 事象への言及点；S：発話時点）の組み合わせを簡略化した図式で完了本来の文法的意味を表すと

R
|
E — S

すなわち発話時点と事象への言及点が一致することによって、事象が発話時から回顧的に語られることが示される。一方、この図式とは異なり、R が E と一致すれば、言及点は事象が生じた時点にあり、事象は発話時への関与性なく述べられることが示され、本来単純過去形が表す過去の意味の基本的図式となる；

R
|
E — S

完了形が完了本来の意味だけを表すのであれば、こちらの図式は完了形に適応されない。しかし完了形の形式が、本来は単純過去形が表す過去の意味を代替する場合には、この図式は完了形にも当てはめることができる。つまり完了形が完了の意味を表すか、単純過去の意味を表すかは、R がどこに存在するかに依存するわけだが、その R の位置を読み取る手がかりとして、しばしば、同じ節に含まれる副詞句が有益に働くことが知られている。たとえば

> Sutradan nemah petlje preskočiti visoki zid oko parka, ne mogah jesti, piti, počinuti. (Matoš, Balkon)
>
> 翌日には公園の周囲の高い壁を飛び越える力もなく、食べることも飲むことも、休むこともできなかった。

という文では動詞時制には単純過去（アオリスト）が用いられ、「翌日」という、過去のある特定の時点を指示する時間副詞が共起している。これを上記の図式にあてはめれば

sutradan
R
|
E ———— S
nemah, ne mogah

のようになるだろう。このような、過去の特定時点を指示する副詞句が完了形とも共起するのであれば、完了形もまた、すぐ上にあるような R と E が一致する図式の意

味を表すことが示唆されるだろう。事実、たとえば1.1. で見た第1段階にある標準英語では *At that moment I have met him. のように、「そのとき」という過去の特定時点表す副詞句と完了形は共起しないが、第3段階にあるフランス語では、La garde *est entrée à ce moment.*「守衛の女がその時入ってきた（Camus)」と「その時」という副詞句と完了形（複合過去）を共起して用いることができる。そこで以下では検討対象の古チャ方言テクストで完了形がどのような副詞句と共起して用いられているかを検討した。

3.3. 検討対象とした3つの文献において、完了形が過去の特定時点を指示する副詞句と共起する例を見いだすことができる。以下はそうした用例で、イタリックで示した部分が副詞句である：

(12) - O moj gospodine, *kada* jih je Bog v toliko veličanstvo postavil, da zač jim ni tada moć dal da bi je v dobri užival? [DV 213]

おおわが主よ、神は彼らにそれほどの権威をお与えになった時、その時なぜ力をお与えになり善においてそれを行使されなかったのか。

(13) - *kada* sam te ja viděla ali *kada* sam ta glas preslatki slišala? [DV204]

いつ私はあなたを見たか、いつあなたの甘美な声を聞いたか？

(14) - Reci mani ča si činel *v noć ovu*? [ŽSO 56]

今夜何をしたのか、私に言いなさい。

(15) - kako ste *danas* razumili na bregu kada su vam gospoda dali vsakoj strani pisma! [IR 11b]

今日、貴紳方があなた方それぞれの側に書状を渡した時、あなた方が理解したとおりに。

完了形が表す過去の一つに「最新のできごと（hot news)」を表す用法があるが、この意味は次の例で確認することができる：

(16) I kada se jure tělo poukrěpi počuvši v sebě dušu poče praviti vse ove rěči ke ste vi *sada* slišali. [DV 218]

そして肉体が力を得、自らのうちに魂を感じ始めると、今あなた方がお聞きになったこれらの話を語り始めたのです。

次の例では、過去に生じた事象が完了形で示され、その時点を指し示す副詞句「～して以来」という表現と共起する；

(17) - Ese, četrideset let je *otkole sam rval* jednoga koludra. [ŽSO 39]

私が一人の修道僧を倒して から40年がたちます。

(18) - *Odkole sam vazel* ženu moju, ni ja pregrišil sam ni ona, da u čistoći stojiva. [ŽSO 88]

妻を娶って 以来 私も妻も罪を犯さず、身を清く保っています。

「常に」という副詞句は時間的持続・反復を表し、通常未完了相と共起して現れる。次の例はそのような副詞を含み、不完了体動詞の完了形が反復あるいは状態を表すものである:

(19) Ja jesam *vazda* poli tebe hodil i kamo si se koli ti obrnul i kada si sěděl i jel i pil, govoril, mlčal i spal i va vsako vrime nisam bil indi nere pred tobu i s tobu. (例 8 と同じ) [DV 204]

(20) - I zato drži se dobro i budi vesela, zač ja jesam anjel tvoj ki sam ti služil *vazda* v životě tvojem. [DV 205]

それゆえに行いをよくし心を明らかに持ちなさい、私こそはあなたの生涯でいつでもあなたに仕えた天使なのだから。

(21) - Da jesmo *vazda* tako držali razvodi od kunfini meju sobu, i vaš otac ni se nigdar suprotivil, nego je *tako vazda* s nami prijaznivo živel. [IR 30]

我々はいつも互いの共通境界からの境界区分を守ってきたし、あなたの父上が反対されたことはなく、いつも我々と仲良く暮らしていました。

4.

これまでの検討内容から、古チャ方言文章語の完了形は、動詞のアスペクト的制約に関係なく、すなわち完了体からも不完了体動詞からも作られ、完了本来の意味を表す場合もあれば単純過去形に代わりうる状況で用いられる場合もあることが明らかになった。同時に、単純過去形もテクストの語りの形式として多用されていることを考えれば、完了形と単純過去形の競合関係は、1.1. で想定したうちの第二段階に相当する状態にあると考えられる。その中でとくに、両者が競合する場合すなわち過去の意味を表す状況では、文体的機能分担が生じ、語りの部分の形式としては単純過去形が、また直接対話の部分では完了形がより優勢に用いられる。このことはまた、当時の話し言葉の世界においてはすでに完了形が過去時制の形式として優先的に用いられていたことを示すといえるかもしれない。

南スラヴ世界では、一番北に位置するカイ方言並びにスロヴェニア語は第四段階

に至り、その南西、沿岸部に分布する現代チャ方言は第三段階と第四段階の中間ほどの状態、またカイ方言より南に位置するシト方言（セルビア／クロアチア／ボスニア標準形）では現在もなお第三段階を保っている。さらに南のマケドニア語、ブルガリア語においては、完了形が証拠性の特別な機能を担うようになったとはいえ、完了の意味でも用いられ、一方単純過去形は過去時制の形式として普通に用いられている。この関係は第二段階あるいはむしろ第一段階に近い競合関係ということができる。もし単純過去形と完了形の競合が古くスラヴ語に共通して存在した体系であると単純に仮定したなら、現代のバルカン半島におけるスラヴ語の動詞時制形態において見られる単純過去形と完了形の競合関係は、単純過去形の衰退と完了形の機能拡張が地理的北部から順次進み、バルカン中央で停滞し、スラヴ世界の最も南の地域ではそれが起こらないまま今日に至った状況を反映していると推測することができる。その中で、13-16 世紀の古チャ方言文章語は、ちょうど完了形が過去時制への機能拡張を進行させる過程の変化の様相をとどめているといえるかもしれない。

南スラヴ語（および他のスラヴ語）の完了形の段階

段　階	言 語 の 例
I	（ブルガリア・マケドニア語）
I～II	古チャ方言文章語
II	（上ソルブ語）
III	現代クロアチア標準語
III～IV	チャ方言
IV	カイ方言、スロヴェニア語

分析資料

ŽSO : Malić, D. (red.) 1997. *Žića svetih otaca. Hrvatska srednjovjekovna proza.* Zagreb : Matica Hrvatska, Institut za Hrvtaski jezik.

DV : Stefanić, Vj. 1969. *Hrvatska književnost srednjega vijeka.* Pet stoljeća hrvatske književnosti. Knj.1. 200-219

IR : Bratulić, J. 1992. *Istarski razvod.* Pula : Libar od Grozda.

引用文献

Белић, А. 1909. "Замѣтки по чакавскимъ говорамъ." ИОРЯС. 181-266.

———. 1931 (1999) *Историја српског језика. Речи са конјугацијом.* (1999) Изабрана дела Александра Белића. 4. 327-484.

Ивић, П. 2001. Српск и народ и његов језик. Целокупна дела. V. Нови сад.

Мейе, А. 1951. *Общеславянский язык.* М.: Изд. Иностранной литературы.

Damjanović, S. 1984. *Tragom jezika hrvatskih glagoljaša.* Zagreb : HFD.

Hamm, J., Hraste, M., Guberina, P. 1956. "Govor otoka Suska." *Hrvatski dijalektološki zbornik.* knj. 1. Zagreb, 7-213

Hercigonja, E. 1983. *Nad iskonom hrvatske knjige.* Zagreb : Liber.

Houtzagers, H.P. 1985. *The Čakavian Dialect of Orlec on the Island of Cres.* Studies in Slavic and General Linguistics. vol.5. Amsterdam, RODOPI.

Kalsbeek, J. 1998. *The Čakavian Dialect of Orbanići near Žminj in Istria.* Amsterdam : RODOPI.

Lencek, R. L. 1982. *The Structure and History of the Slovene Langauge.* Slavica.

Lončarić, M. 1996. *Kajkavsko narječje.* Zagreb : Školska knjiga.

Lukežić, I. 1996. *Trsatsko-Bakarska i Crikvenička čakavština.* Rijeka : Dometi.

Mikhailov, N. 2001. *Jezikovni spomeniki zgodnje slovenščine. Rokopisna doba slovenskega jezika (od XIV. Stol. Do leta 1550).* Trst : Mladika.

Peco, A. 1985 (3). *Pregled srpskohrvatskih dijalekata.* Beograd : Naučna knjiga.

Režić, K. 1980. "Perfektivni imperfekt u glagoljskom lekcionaru i u starijoj hrvatskoj književnosti. " *Slovo*, 30. Zagreb : Staroslavenski institut. 89-100.

Wreinrich, H. 1971. *Tempus.* Besprochene und erzählte Welt (ハラルト・ヴァインリヒ『時制論 文学テクストの分析』紀伊国屋書店　脇坂豊ほか訳、1982)

Abstract

Perfect and Past in the Old Čakavian Literary Language.

Keiko MITANI

In this paper categorial meaning of the Perfect[PF] in the Old Čakavian literary language is examined. In contemporary Čakavian dialects, which are used in the Istria peninsula and northern part of Dalmatia, the aorist and the imperfect, i.e. old synthetic forms of S[imple]P[ast], are almost extinct. As in many Slavic idioms which have lost SP in their history, Čakavian uses PF as an alternative to SP to express the past time reference. In Čakavian as well as in other Slavic idioms, therefore, PF has been used both as a past tense marker and as a marker for the original perfect meaning. In the Old Čakavian literary language, a written variation of vernacular Čakavian dialect used in the Croatian medieval period, however, the said forms of SP were attested quite frequently. In our study, three Old Čakavian texts are analyzed to see how PF and SP are used and identify what the categorial features of PF are. Two of the selected texts, Žića svetih otaca (*Vitae sanctorum patrum*) and Dundolovo viđenje (*Tundale's vision*) are translated from Latin (the latter can be a text from Latin via Old Czech) and belong to the same genre of narrative literature. The third one is a Croatian original glagolitic law document, Istarski razvod (*Istrian land division*). All three texts have the same structure in that they are composed of narrative and dialogue parts. Our analysis found that the distribution of the verb forms in these parts is not equal. SPs are used for basic predication forms in narrative parts but rarely used in dialogues. Contrarily, PF is used almost exclusively in dialogues. If PF is used in narratives, it is because this form is required grammatically in order to express the relative past time. The grammatical meaning of PF is also

examined by observing what kind of adverbial phrases co-occur with PF. These behavior tests appear to suggest that PF is used to express the past tense reference as well the original perfect.

In conclusion it can be stated that in the Old Čakavian literary language SP and PF were both used for the past time reference and the difference between them consists in stylistic function: SP was used for narrative predication and PF was almost exclusively used in dialogues. This fact indicates that SP was favored in written forms, while PF was felt more convenient for speech.